

## はじめに

「日本の社会保障制度は、給付費が130兆円にのぼり、給付と負担の見直しが求められている」、「急速な少子高齢化が進み、こども・子育て支援、年金、医療・介護など、制度改革が必要になっている」。このような解説や報じられ方は多くの国民が日頃から耳にしているだろう。

その一方で、高齢世帯の孤立やヤングケアラー、ひきこもり問題など、社会保障に関する問題として報じられる個々のエピソードを見たり読んだりしていて、普段私たちが「社会保障制度」と聞いて思い浮かべる制度をシンプルに利用する程度では解決が難しいのでは？と感じることはないだろうか。

我が国の社会保障制度は、ライフステージの各段階において典型的と考えられる不確実性に対し、各リスクの「分野別」に制度を創設し運用してきた。これにより国民生活の安定と安心に大きく寄与してきたことは間違いないが、複合的な要因による課題、分野の境界線上、あるいは制度の狭間にあるため対応が難しい課題が、年々存在感を増している。

このような制度の狭間の課題、複雑化・複合化した課題は、その中身は異なるものの、従来から存在するものであった。従来は、地域の紐帯と交流をベースとした助け合いの基盤が残っており、家族や親戚が近場に住んでいることも多く、それらをベースとしたインフォーマルなケアが提供されて対応が行われてきた。公的制度の側も、その根本的な趣旨を損なわない範囲でケアを補完、代替するなど柔軟に運用することで対応してきた。

しかし、現在は状況が異なる。少子高齢化が進展し、単身世帯の増加や世帯規模の縮小が進むとともに、地域における交流意識も弱まり、これまでのフォーマル又はインフォーマルなケアでは対応が難しい、多様化、複雑化した課題が顕在化している。

こうした時代の変化、課題の多様化・複雑化に対応するには、今後どのようなアプローチが必要なのかを明らかにするため、

今回の厚生労働白書第1部は、「つながり・支え合いのある地域共生社会」と題し、全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる社会の実現に向けた展望を論じることとした。

「第1章 社会保障を取り巻く環境と人々の意識の変化」では、我が国の社会保障とその前提となる社会全般の環境変化と国民の意識の変化を、意識調査の結果を取り混ぜながら分析する。次ぐ「第2章 福祉制度の概要と複雑化する課題」では、分野別に発展してきた高齢者、障害者、児童の福祉制度の沿革と現状に触れた後、制度の狭間の課題や、複雑化・複合化し分野横断的な対応が求められる課題の現状を、いくつかの具体例を挙げながら分析する。そして「第3章 「つながり・支え合い」のある地域共生社会の実現を目指して」では、近年、様々に行われている対応策を紹介しつつ、今後の取組みの方向性を展望する。折に触れて先駆的現場を取材したコラムも掲載しているので、是非お目通しいただきたい。